

# 「10年辛抱すれば、ほとんどの人は専門家になれる」は本当だと思う



おがさわら はる ひこ  
小笠原 春彦 教授

社会情報学科 / 計画科学講座 統計科学、  
応用統計、計画科学

**私はクレペリン検査を受けたことがあるのですが……。**

小笠原：クレペリン検査のデータ解析と判定法の開発もやってきました。当初、国鉄には職員が40万人ほどいました。その多くが検査の対象者でした。実際に実施するのは、当時の各鉄道管理局にいる検査担当の人ですが、その元締めのような仕事をしていました。検査は段階性になっていて成績が悪い人は、最後は研究所の研究者が1対1で個人検査をみっちりやるんですよ。私もやりました。

**クレペリン検査/ドイツの心理学者クレペリンが考案した、連続した計算作業の結果から性格を判断する検査。**

**それから途中でシカゴ大学へ留学されていますね。**

小笠原：25年くらい前になります。1年だけでしたけれどもね。今でもずいぶん利用している論文なんかがあるときちょうど出始めた頃でしたね。適性検査データに統計モデルを設定して解析するという、そういうものなのですが、先生が最新の成果を授業で使って、今は理解できるのですが、最初の頃はなかなかどれが最新が分からないのですよ。だいたいたってから気がつきました。ずいぶん情報提供というものを考えていたんだなと。

**帰国後はどうされましたか。**

小笠原：メインの検査としてのクレペ

リン検査の他に、もう1つ私が携わったのは、成人用知能検査です。全員ではないですが、運転士とか車掌だとか、安全に関わる仕事をしている人がいますね。その人の注意力によって、旅客の命がかかっているわけです。一定水準以上の認知的機能があることを確かめる必要があって、成人用知能検査を実施していました。その開発の仕事が量としては多かったですね。

**その知能検査に、先生が現在研究されている行動計量学が関係して来るわけですね。**

小笠原：計量心理学の方法として因子分析があります。たとえば、記憶や計算問題の成績などたくさんの能力の指標がありますね。そこから基本的な目に見えない変数を統計的に取り出す、そういう方法のことを因子分析といいます。それは、知能の研究の中から開発されたのです。検査が何を計っているか分からないと使い物にならないですからね。このような解析方法を私なりに改善しているうちに統計的方法そのものに興味を持つようになってきたわけです。まあ、ミイラ取りがミイラになったような感じですね。たまたま、統計の分野の教員を募集していたという縁で、本学に採用していただいたわけです。

**本学での教員生活は1995年からですよ。その間、欧米の代表的な学術雑誌に論文を書かれていますね。**

小笠原：運が良かったと思うのですが、これらの論文は、半分以上は因子分析に関係しています。現在は、ほとんど心理学と関係なくなりましたが、その分野で成果を使っただけのことも知れないということで、計量心理学関係の雑誌に投稿するという具合です。そこで断られそうになると統計の雑誌に鞍替えしたりしますね。

**学生になにかアドバイスがあったらお願いします。**

小笠原：さきに因子分析について話しましたね。それによっても人間の知的機能の多様性が分かります。相互に関

- 1974年3月 東京大学教育学部教育心理学卒業
- 1974年4月 日本国有鉄道入社
- 1979年3月 同鉄道労働科学研究所主任研究員
- 1981年9月 シカゴ大学大学院行動科学部  
方法論専攻留学（1982年9月帰国）
- 1987年4月 財団法人鉄道総合技術研究所主任研究員
- 1995年6月 小樽商科大学商学部教授

**先生は、本学に来るまでは国鉄、いまのJRの研究所に勤めておられましたね。そこでどのような仕事をなされていたのですか。**

小笠原：1974年に大学を卒業してすぐに国鉄に入社しました。小樽に来るまで、都合、21年間勤務したことになります。鉄道には安全に関わる仕事をしている人がたくさんいますね。法律で心理適性検査の実施が義務づけられているので、その検査の開発だとか管理だとかそういうことをやっていたですね。